FROM United Kingdom

中野香織
⑩フローリスとフレックル

斎藤敦子様。

そうだったのか！　っていきなりで恐縮ですが、感動しましたよ。「グレースと公爵」に見られる「フランス男とイギリス女の癒し系友愛」の謎が、イギリスのアロマの伝統と結びついた日には。いわれてみれば、コンビニ並みに立ち並ぶ「ボディ・ショップ」でも、王室御用達の「フローリス」や「ペンハリゴンズ」でも、麝香系の官能的な香りはごくわずか（しかも不出来）、女性用の人気商品のほとんどが、癒しの植物系ですよね。パリの「ゲラン」の濃厚で緊張感のある香りと比べると、その特徴はますます明らか。

そういえば「フローリス」って故ダイアナ妃も愛用してたそうですが、それって、チャールズ皇太子が麝香系つけてそうな（？）カミラ・パーカー＝ボウルズからついに離れられなかったことと無関係ではなかったりして。

ま、これは憶測にすぎませんが、実はいまチャールズの女性の選択をふと連想したのは、敦子さんの注目映画情報を聞いてのことなんです。〈「ベッカムに恋して」のジョナサン・リス＝マイヤーズが、誰が見ても美女のカイラ・ナイトリーではなくインド娘を選ぶ〉っていう話。このインド娘も麝香系だったっていうのは大いに考えられますが、とりあえず匂い問題はさておき、面白いなと思ったのは、「（稀なる）イギリス美女は、フツーのイギリス男に選ばれにくい」ということ。

で、イギリス美女は最終的に誰とくっつくのかというと、最近の映画界では、アメリカ男だったりしませんか？「セレンディピティ」でジョン・キューザックを翻弄するケイト・ベッキンセール、「抱擁」でアーロン・エックハートを惑わせるグウィネス・パルトロウ（アメリカ人だけど役柄がイギリス女性）、実生活編ではマイケル・ダグラスをゲットしたキャサリン・ゼタ＝ジョーンズとか。あ、だいぶ前になるけど盲目のアル・パチーノとタンゴ踊ったのもイギリス美女でしたね。ガブリエル・アンウォー。「香水はフローリス」って嗅ぎ当てられたりして（彼女らを便宜上、美女としときます）。

なぜアメリカ男がイギリス美女に弱いのか？　ケイト・ベッキンセールの腕の「イングリッシュ・フレックル（そばかす）」でジョン・キューザックが嬉しそうに星座を描くシーンなんかを見ると、病的なまでにしみやそばかすを消そうとする人工的なアメリカ女に疲れたアメリカ男が、意外に大雑把なイギリス美女を新鮮に感じるのかな、と思ったりもするんですが……？

「セレンディピティ」

ドーバー越えて

斎藤敦子
中野香織

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談議が交わされる。

カット・井上陽子